

校友会設立40周年記念誌

かしわ

第3号



日 立 市 立 多 賀 中 学 校

日 立 市 立 多 賀 中 学 校 校 友 会

— 目 次 —

「かしわ」第3号発刊に寄せて	校友会会長 小野 勝久	P 1
ピンチをチャンスに、 新生多賀中のスタートの年	多賀中学校校長 内山 信弘	P 2
先輩からのメッセージ 東日本大震災から10年	吉成 明	P 3
「5分間走」、そして後輩たちへ	滝崎 成樹	P 4
校友会設立40周年		P 5
40周年記念感謝状贈呈式 多賀中学校卒業生のお話を聞く会 脚下照顧		
感謝状受賞者より		P 6
久下谷 晃一 助川 典子 西山 光江 野間田 信子		
クラス会開催記		P 8
昭和32年度卒業 3年11組 同 3年12組 昭和46年度卒業 3年生 昭和58年度卒業 3年生		
多賀中学校沿革の概要及び校友会活動年表		P 11
多賀中学校校歌・応援歌		P 16
思い出の写真		P 17
校友会会則		P 20
編集後記		P 26

「かしわ」第3号発刊によせて



多賀中学校校友会 会長 小野 勝久

この度「かしわ」第3号を発行するにあたり、お忙しいところ玉稿をお寄せいただいた多くの方々に厚くお礼を申し上げます。

多賀中学校創立以来、この学び舎を巣立った25,423人で構成されている校友会も関係各位のご尽力により、お陰様で令和2年（2020年）3月、設立40周年を迎えることが出来ました。関係者の皆さまに心から感謝申し上げます。

10年前の30周年記念式典で、私は「絆」の大切さを申し上げました。先輩、後輩との縦の「絆」、同学年の仲間との横の「絆」。この二つの絆が、卒業後の一人一人の人生にとって、ある時は励まされ、ある時は慰めをしてくれる貴重な財産であると申し上げました。この考えは今も変わっていません。在校生の皆さんには、卒業後いろいろな分野で活躍する人材になるようこの多賀中で大いに学び、良き友を作ってくれることを願っています。

令和2年1月から国内のみならず世界的に蔓延している新型コロナウイルス感染症により日常生活は「新たな生活様式」へ激変し、不要不急の外出自粛や学校の臨時休校といった社会変化は、校友会の活動にも影響を与えることになりました。校友会の設立目的に照らして会員相互の親睦と団結は出来ているか、母校の健全な発展に寄与する活動をしてきたかなど、立ち止まって考える機会になりました。一方、校友会が次の50年に向けての新たなスタートに相応しい節目の行事をいろいろ検討しましたが、令和2年は市教育委員会の指導もあり多賀中学校では全学年を一室に集めての行事は一切行わないこともあって式典などは行わず、感謝状の贈呈、記念誌「かしわ」第3号の発行、資料室の整備を行うことに致しました。とくに、学校のご配慮により感謝状贈呈式が開催でき永年にわたり校友会の発足、維持、発展にお骨折りを頂いた方々に感謝の気持ちを表せたのがせめてもの救いでした。

結びに、『かしわ』第3号の発行にあたり広告でご協賛頂いた方々や編集委員会の皆さまにも心からお礼と感謝を申し上げます。

◆令和3年1月1日現在 多賀中学校生徒 在籍数

第1学年	3クラス	106	人
第2学年	3クラス	113	人
第3学年	4クラス	119	人

合計 338人 教職員数 30人

ピンチをチャンスに、新生多賀中のスタートの年



日立市立多賀中学校長 内山 信弘

校友会の皆様には、伝統ある多賀中学校を長きにわたりご支援いただいておりますことに、深く感謝申し上げます。また、昭和55年3月、初代会長 森 秀男 様が設立し、第2代会長 山本 忠安 様、第3代会長 小野 勝久 様と引き継がれ、今年、多賀中学校校友会が設立40周年の節目を迎えられましたこと、誠にめでたうございます。

さて、去年は、新型コロナウイルス感染症の影響で、2月28日に全国の学校等へ臨時休校の要請、4月7日に緊急事態宣言が出され、学校生活のみならず、社会生活全般においても様々な自粛を余儀なくされました。

6月に入り、ようやく一斉授業が再開され、多賀中生の元気な声が戻ってきました。毎朝の検温などの健康チェック、手洗いの励行や校舎内の消毒を徹底するなどの感染症対策をとりながらのスタートです。

そんな中、中体連主催の全国・関東・県・県北総合体育大会や吹奏楽コンクール等が初の中止となりました。毎年、各部活は上位大会において、優秀な成績を修めてきただけに、これらの大会等を目指して練習に励んできた生徒たちにとって、目標の喪失感は大きいものでありました。

その後、各方面の関係者のご尽力のお陰で市内総体の代替大会や、吹奏楽部のコンクールの代替としての演奏会を用意していただきました。運動部の3年生にとって、最後の晴れ舞台となることもあり、いつもの大会以上に気持ちを込めて全力で試合に臨んでいました。吹奏楽部は、東関東吹奏楽コンクールに6年連続出場してきた伝統を胸に秘め、素晴らしい演奏を披露することができました。

学校行事も今できることを、今だからできることを考え、工夫しながら実施しました。体育祭は、種目を絞ったり、時間を短縮したりと、例年とは違った形式で行いましたが、仲間と笑顔で力を合わせて取り組む姿が見られました。かしわ祭では、学年ごとの合唱コンクール、ビデオによる生徒の特技発表など、保護者にその姿をご覧いただくことができました。生徒たちにとって、仲間との絆を深めるとともに、この上ない達成感を味わうことができたのではないのでしょうか。

これから先も困難な状況が続くかもしれませんが、自ら学び、考え、判断できる人となるよう、互いを高め合い成長し続けることのできる多賀中生の育成に努めてまいります。

卒業後、多賀中学校での生活を振り返ったときに、新しい生活様式での学校生活を創造し、歩み出した年として、懐かしく思い出されるメモリアルイヤーになっていることを願っています。

校友会の皆様には、引き続き多賀中学校への温かいご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げますとともに、今後ますますのご発展をお祈り申し上げます。

先輩からのメッセージ

東日本大震災から10年



昭和34年度卒業生 前日立市長 吉成 明

多賀中学校校友会40周年記念おめでとうございます。

前回の30周年記念誌に投稿してから既に10年が過ぎたことに時の流れの早さを感じています。この10年を振り返ると、私にとって激変の連続でした。

2011年2月に日立市長選に立候補を表明し、その直後の3月11日にあの東日本大震災が発生しました。市民の救援や避難、ガソリン不足や水道、電気、道路等のインフラ復旧、更には福島第二原発事故など、大混乱の中での市長スタートでした。

正直に言って一時は途方に暮れましたが、このような時に市長になったことが天命であり天運と受けとめ、震災復興に全身全力で傾注し、それが達成したら退くとその時心に決めました。

おかげで就任直後に立てた日立市震災復興計画も4年間で何とか目途を立てることができました。これも全市民が心をつにして復旧復興に取り組んで頂いた結果であり、深く感謝しております。特に、自らも被災しながら自らの復旧を後回しにして協力してくれた人々や、混乱の中で姉妹都市の群馬県桐生市、友好都市の山形県山辺町の皆さんはじめ遠くから多くの人たちによる物心両面にわたる支援は今も忘れえません。復興に向けて惜しまず協力と支援を頂いた皆様全員に今でも「感謝」の一字です。

昨年よりコロナウイルスで世界中が混乱の中にあります。国内でも毎日感染拡大で人々は戦々恐々の日々です。しかし、人類は長い歴史の中で幾多の大災害や疫病と対峙してきました。そしてこれらの大災厄も乗り越えてきたことを考えれば、新型コロナウイルス感染も終息できると信じています。

多賀中学校生徒の皆さん一人一人、これからも様々な困難や災害に直面するかもしれません。しかし、誰もが同じように様々な困難や災害にぶつかりながら乗り越えて生きてきました。ぜひ、困難や災害にめげないで明るく楽しい中学生生活を送れることを、多賀中学校先輩の一人として心から祈っております。

「5分間走」、そして後輩たちへ



昭和52年度卒業生

内閣官房副長官補兼国家安全保障局次長 滝崎 成樹

43年。私が多賀中を卒業してからの年月。残念ながら暫く母校を訪れていない。随分長い年月が経ってしまったが、今でも覚えているのは、広いグラウンドと「5分間走」。この「5分間走」、現在も日立に住む同級生によると、暫く前になくなってしまったらしい。

「5分間走」は、放課後の全校清掃の前の5分間、全校生徒が敷地の周りに設けられたコースをただ走るだけのもの。記憶が定かではないが、走った距離を記録表に書き込み、地球を何周したとかを競うものだっただろうか。

体調が悪い時や部活の疲れが溜まっている時は、必ずしも嬉しくない日課ではあったが、当時「多賀体育学校」との異名をとるぐらいスポーツでは市内で名を轟かせていた多賀中の基礎体力を支えていたことは間違いない。当時私は、野球部に所属しつつ陸上部の借り出しで陸上の大会の中長距離種目にも出ていたので、日常的な練習ができない中で貴重な練習の機会にもなっていた。

それは遠い昔の話。その時の走る習慣は、恐らく今の私の基礎体力も支えてくれているかもしれない。週末に時間があれば軽くジョグする程度しか走っていないにもかかわらず、本番が近づいてから走り込みをするぐらいで、これまで、ロンドンマラソン1回、東京マラソン4回を含め6回もフルマラソンを完走することができた。これは、きっと多賀中当時の「5分間走」のお陰ではないかと思っている。現在それなりの運動は、月に数回のフットサルだが、これからも、スポーツをやる基礎体力を維持するためにも、多賀中の広々としたグラウンドと「5分間走」を思い出しつつ走る習慣は維持したいと思っている。

昨年1月に始まり世界中に広がった新型コロナの感染。私たちの生活のあり方を既に大きく変えてしまったし、今後も変えていくことだろう。

私より40歳以上も歳が離れた後輩たちが、あの同じ敷地にある学校に通っていると思うと感慨深い。その後輩たちは、その大きく変化した世界で生きていくことになる。そのような中でも、是非好きなこと、やりたいことを追い求めてほしい。もちろん、最後は、自分の能力と現実との間で妥協しなければならない時が来るだろうが、人生は長い。今や女性は87歳、男性は81歳が平均寿命。やり直しは十分きく。

好きなこと、やりたいことを追い求める時には、是非自分の生活する場所は、日本を越えて広がっているということも頭の片隅に置いておいてもらいたい。高校生や大学生の時に留学してもいい（数週間から数年まで色々あり得る。）し、旅行することでもいい。仕事の場として日本の外ということもある。何となく面倒くさい、危なそうと思うのであれば、まずは旅行から始めるのがいいだろう。

外務省で働いていることから、これまで色々な国を訪れ、住んできたが、そのたびに様々な刺激を受けた。日立の穏やかな気候から見ると、想像を絶する寒さや暑さ。私は食いしん坊なので、食事が美味しい国、今ひとつの國というのも大きな発見。カレーが美味しいパキスタンでは、食べ過ぎで何度もお腹を壊したし、日本で売っているイギリスパンなどという美味しいパンなどイギリスにはないことを知って驚いた。宗教や習慣の違いから受ける衝撃も大きい。スポーツと言えば野球だった自分が、現在日本サッカー協会の仕事に関わるきっかけは、サッカーの母国イギリスに住んだことだった。

百聞は一見に如かず。可能であれば、是非少しでも若いうちに海外に出かけてみてほしい。若い時の方が刺激は大きく、得るものは大きい。

日立は住みやすい町。私は、名前に「成沢町」から取った「成」が付くこともあり、18歳まで過ごした日立は本当に心のよりどころ。多賀中の後輩たちには、是非心は日立に残しつつ、少しでも日本の外に目を向けてもらえたらなあと思っている。

校友会設立40周年

40周年記念感謝状贈呈式

2020年11月27日（金）5校時、体育館を会場に、3年生を対象とした校友会の出前授業「卒業生のお話を聞く会」の前半に、感謝状の贈呈式を行いました。

校友会の役員として、長年にわたり会の運営と発展にご尽力された方々に小野会長より感謝状が贈られました。当日は11名が出席してくださいました。本当にありがとうございました。



感謝状贈呈



森様の謝辞

◆感謝状贈呈該当の皆様◆ （順不同）

- | | | | |
|---------|---------|---------|---------|
| 森 秀男 様 | 山本 忠安 様 | 白石 陽一 様 | 大窪 寿一 様 |
| 久下谷晃一 様 | 白土 照男 様 | 西山 光江 様 | 助川 典子 様 |
| 黒澤 清 様 | 西野 幹雄 様 | 小澤 美紀 様 | 野間由信子 様 |
| 黒澤 保子 様 | 今野 陽子 様 | 小林真由美 様 | 沼田 浩一 様 |

多賀中学校卒業生のお話を聞く会

昨年度より、校友会の出前授業として3年生を対象に「多賀中学校卒業生のお話を聞く会」を行っています。卒業を迎える3年生が、多賀中学校を卒業した先輩方の人生観や職業観を聞き、



小野勝久会長

高村純平先輩

塚尾久美子先輩



白石陽一先輩

今後の生活に生かすことを目的としています。上の写真は、昨年度の先輩方の講話です。

そして、今年度は感謝状を受けられた方を代表として、白石陽一様にご講話をいただきました。それぞれがご自身の多賀中在籍時代の話題やその後の生き方を語られ、生徒の皆さんが真剣に聞く姿が印象的でした。

脚下照顧

きゃっかじょうこ



多賀中学校校友会設立40周年記念

校友会設立40周年を記念して、感謝状贈呈式後に全生徒さんに、キーホルダー型LEDミニ懐中電灯をプレゼントしました。部活動等で下校の時間帯が暗くなるこの時期、安全のため足下を照らすのに役立っています。

感謝状贈呈式では小野会長から3年生に、第2学期終業式では内山校長先生から全生徒に、この懐中電灯にちなんで「脚下照顧」という言葉を紹介していただきました。もともと禅家で足下に気をつけよとの意味ですが、転じて身近なことに十分気をつけるべきだということ。また、自分のことをよく反省すべきだということ。他人にとやかく言う前に、まず自分自身を見つめ直せという戒めのことばです。生徒の皆さんはもちろん、私たち大人にとっても戒めとしたい大切な言葉ですね。

感謝状受賞者より

ピンポンが好きだった君へ



昭和28年度卒業生 久下谷 晃一

中学三年の夏休み、仲の良いS君がほとんど毎日我が家へやってきて、ピンポン（卓球）をやろうと誘われ、近くの茨城大学の寮へ行った。そして、私の左利きを見て「左利きは嫌いだ」と言いながら、十回やるうち九回は勝たれてしまう。

半年後に高校受験があり、彼は難なく水戸一高に入った。その後、一番の難関である東京大学医学部にパスした。卒業後は東大病院に入り、教授として日本の医療の貢献者となった。

ピンポンから何十年の年月が経った。

「君に絶対会いたい。」が、音信不通。

今度東大の赤門をくぐって、君の消息を見つけたい。私も学力では入れないが東大の赤門はくぐれるだろう。何としてでも会いたい。そしてあなたの母校に二人して行こうではないか。

五十周年にでも、話聞きたいな。

心を一つにした絆



昭和34年度卒業生 助川 典子

歴史ある校友会の役員として、諸先輩に学ばせて頂きました。その上、感謝状も頂きありがとうございます。母校を愛し、心を一つにした絆と深い情熱で生徒達を支援してきました。これからは伝統を守り地域の活性化に尽くしていきたいと思えます。

20年前に地域課題である高齢化に貢献すべく「介護支援センターひまわり」を立ち上げ、一昨年には「子ども食堂」を始め、地域の子供や高齢者においしい食事を届けています。昨年には障害者就労支援事業所を開設し、高齢者施設でたくさんの障害者に仕事をしてもらっています。「高齢者、子ども、障がい者、地域みんなを支え合う居場所づくり」という目標を掲げ、地域貢献をこれからも進めていきます。

15の私を想う



昭和41年度卒業生 西山 光江

東京オリンピック開催の1964年が中学1年生だったことは、鮮明な記憶です。サッカー代表の卒業生の学校訪問、教室でのテレビ観戦もありました。体育祭が4つの集団だったのは、小学校との規模の違いに驚きました。私は、学年560数名の中に埋もれるように生活していましたが、初めての英語の学習は楽しく、得意科目で3年間の自信になりました。「手紙～拝啓15の君へ～」を聴く度、辛さを抱えた15の自分を想います。進級した3学年の新しいクラスに失望し、外見上は何も問題なく、内面では全く意欲をなくしていました。今は、皆何かしら悩みはあったはずと理解できますが、当時の私の心に余裕はなく、落ち着くまでには時間が必要でした。

「感謝状」に想う



昭和41年度卒業生 野間田 信子

校友会四十周年記念行事に出席させて戴き、在校生の皆様が礼儀正しく整然と迎えてくださったことに大変感動いたしました。

私の中学時代は全校生徒約千五百名、強風で二階のガラス窓が割れるような木造校舎でした。今でも同級生が集うと、卒業間際での未明の校舎火災の事や体育祭の仮装行列、謄写版で刷った修学旅行の歌集の事など思い出話は尽きません。

P T Aとしては創立五十周年事業に携わり、校友会三十周年行事にも参加できました。

この度、思いがけず感謝状をいただきましたが、多賀中での良き時間は宝物です。私から心よりの感謝を申し上げますと共に、多賀中のさらなるご発展を願っております。

クラス会開催記

喜寿の集い ― 第17回クラス会

昭和32年度卒業3年11組 井上 政子

令和2年11月29日（日）8年ぶりに旧3年11組のクラス会がホテル テラス ザ スクエア 日立に於いて、全国的に新型コロナウイルス感染症が拡大している中で、三密防止対策をしっかりとって開催されました。

私達は高齢者のため、歩行困難な人・体調が悪く参加不可能な方等が多く残念ながら5名の参加で少し寂しかったが、埼玉県から駆けつけてくれた人もいて、各自の近況報告や卒業アルバムから抜粋した恩師 故島崎敬二先生の言葉や、懐かしい修学旅行の写真などを見ながら、クラスメートの消息や思い出話に花が咲き、あっという間の2時間でした。

前回は、平成24年にクラス会を開催しています。在学途中で山形県に転校した級友を訪ねる10名参加のバス旅行でした。前日まで蕾だった上杉神社のお濠の桜が奇跡的に満開になりとても美しかったのが記憶に残っています。神社での古稀のお祓いを受け、名湯白布温泉に1泊し旧交を温める楽しい旅でした。

今回は傘寿にあわせ2年後の再会を約束し、一日もはやくコロナが終息し、楽しく集まれる日が来ることを祈念しつつ散会しました。



平成24年4月8日 米沢にて

もっと読む